

<シリーズ『報知大島』を読む(4)>

自治のモーション¹⁾

——国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用に向けて——

阿部 安成

motion1 『報知大島』綴第4分冊は、霊交会所蔵分に表紙はなく、第73号から第106号までの『報知大島』（第76号がだぶり、第90号に「附録」がつく。第105号欠号）と、『演劇ニュース』『共楽団報』『相愛青年団報』がいっしょに綴じられている。表紙にただ「報知大島」とだけ墨書されている自治会所蔵分の綴には、『報知大島』が第184号から第130号まであたらしい号が上になるように綴じられ、それと同数ちかいほかの逐次刊行物が綴られている。それには、第二次世界大戦の戦時下に聯合奉仕団から発行された『聯合奉仕団報』や、その戦後に大島青松園奉仕団文化部から発行された『団報』などがふくまれている²⁾。

『報知大島』綴第4分冊の霊交会所蔵分については、本シリーズ(3)で閲覧、検討したので、本稿では自治会所蔵分の第130号から第184号までを対象とする（ここでは第139号欠、第153号と第166号がだぶり、第172号欠、第178号から第184号までは発行年が記されていない）。

1) 本稿は2011年度滋賀大学研究推進プログラム「基盤研究」助成による研究課題「20世紀日本の病の重層（complications）と生命観の文化研究」と2012年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト研究「療養所空間における〈生環境〉をめぐる実証研究」の成果の1つで、2012年に刊行予定のリプリント版『報知大島』（近現代資料刊行会）に収載される解題の下書きでもある。シリーズの(1)は「自治のレッスン」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.168、2012年8月）、(2)は「自治のデッサン」（同前 No.169、2012年9月）、(3)は「自治の研鑽」（同前 No.170、2012年9月）。

2) この自治会所蔵分『報知大島』綴第4分冊の目録は、阿部安成「かくれんぼの書史—国立療養所大島青松園協和会（自治会）所蔵史料『報知大島』『所報』『全癩患協ニュース』の紹介」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.159、2011年11月）に収載。

motion 2 第130号(1937年4月15日)からまた、題字下の発行年月日と号数の表記が横書きとなる。新総代石本俊市、副総代北山謙三による新体制下(野島所長名の任命記事あり)での最初の号は、冒頭無署名記事「報知の使命」、「感謝欄」に、学芸部による「心の窓」欄が登場し、「潮風」欄が復活した。だが再生「潮風」欄も注意事項の指示で始まった。室の周囲の花畑で野菜をつくるなどという。「椽の下の清潔」については、すでに発せられた注意事項実行への謝辞がみえる。

「心の窓」欄は、「一寸の字かずではあるが、この心の窓欄を一般に開放して、色々のことをみんなに書いて貰ひたいと考へてゐる、個人的な悪口でなしに、人々に知つて貰ひたいことや、読んだ方でも為になることがらを、一口でよいから書いて貰つて続けたい」という希望のもとで新設された欄である。

新体制による第1号発行はもう少し時期が早いはずなのだが、今回は「原紙がなかつた関係で発行が今日まで後れました」との説明があつた(「報知の使命」)。

前号まであつた欄外の箴言はこの号から消えた。

第131号(1936年4月24日)の掲載記事は順に、「綱紀」(無署名)、ぬまい「心の窓」、「お知らせ」、「感謝欄」、「潮風」。「心の窓」欄には、親を不幸にしている自らを恥じ、「社会の人々」からの慰問や寄贈に感謝する稿が載つた。

第132号(1937年5月3日)の掲載記事は順に、「興味」(無署名)、玉造船所造船仕上の鬼山寅二の「大島の人々に送る」(「心の窓」欄)、「お礼」、「感謝欄」、「潮風」。

「心の窓」欄は、「幸うすき汝が住む島はせまくとも、汝が住む世界は吾に勝れり」などと文を連ねる。「潮風」欄では、いくらか唐突に「療養所の文芸と云ふ問題が再吟味される時期に出会した感がある」と告げられた。

第133号(1937年5月9日)の掲載記事は順に、「慣れる」(無署名)、「心の窓」(「田中先生著——塔影居雑録——」)、「感謝欄」、「潮風」。冒頭の記事を引用しよう。

吾々が癩を患ふ病人であることは誰でも良く知つてゐる。そして、その病人は誠に悲惨なものである。さう社会の人々は思つてゐるし、吾々自身若しも人に問はれたら、さう応へるに躊躇しない。しかし、それなら一日中吾々は自分の悲惨などいふことばかりを

考へて毎日泣いて暮してゐるか、と、いふに、さほどでもない。勿論、中には毎日病苦に呻吟してゐられる方も沢山あるが、それも何方かといへば、癩そのものゝ為よりも余病の方が多い。／吾々はかつての日、癩の宣告をうけた時、お互ひに死刑ほど驚いた。それが永い間の患ひに衝撃が衝撃でなくなり、時に新しい事由がない限り涙が出ない。つまり病苦に慣れて病苦が人世化して終つた。初めての軀を使役すると節々が痛むが、続けると痛くないようになるのと同様だ。／こゝで大切なことは、こゝまで乗切つて来た吾々だ、たとへこれから先々肉体は蝕まれようとも、心だけは蝕まれずに堂々癩といふ大敵に勝つて生きぬくと、と、いふその事である。

——この短文を読んで提起できる論点は、1つに、わたしたち癩そしてハンセン病に罹っていないものが、それに罹っているものの像をどのようにかたちづくっているのかということ、2つに、まさに当事者である病者自身もある像に馴染んでしまったということ、3つに、その当事者から提起される肉体より心の正常ということの考察の仕方、となる。

motion3 第134号(1937年5月23日)の掲載記事は順に、内大臣からの寄贈について、「田中先生御夫妻よりのお便り」、「御注意」、「感謝欄」。事業部から、うさぎの餌についで注意が示された。

第135号(1937年6月1日)に凝った題字枠のデザインが登場したが、3号しかつづかなかつた。掲載記事は順に、「訓練」(無署名)、「心の窓」、「お知らせ」、「感謝欄」。

「心の窓」欄は、ずいぶんと淡泊に、「開所当時」から現時までの「大島の同胞の——増加表」を示した。配給部からの「お知らせ」は、高価な黄色い石鹼を配らざるを得なかつたので、6か月は使用してほしいととめた。

第136号(1937年6月10日)に掲載された記事は順に、「境遇」(無署名)、「心の窓」、「感謝欄」、「御注意」、「潮風」。

「心の窓」欄は、「患者」自身が自分の病は「伝染病」と触れ回ることの是非について話題提供。包帯の使用制限について「御注意」。

第137号(1937年6月20日)の掲載記事は順に、「無理」(無署名)、「御注意」、「心の

窓」、「感謝欄」、「あとがき」。「心の窓」欄では、前号のいわば伝染の宣伝への応答 2 通を掲載。

第 138 号（1937 年 7 月 1 日）の掲載記事は順に、「伝染・遺伝説」（無署名）、「御注意」、「心の窓」、「感謝欄」。伝染論議と諸注意と感謝がひしめく紙面だ。

第 139 号が欠号。月 2 回発行といいながらこのところ 3 回発行されているから、この号もおそらく発行されたのだろう。

第 140 号（1937 年 7 月 30 日）の掲載記事は順に、「忠義」（無署名）、「心の窓」、「御注意」、「お報せ」、「感謝欄」。戦時色が濃くなり、戦場へゆけない身ながらの、「聖恩」に報いる「忠義」の途が、「吾々が御心を体して明け暮れ凡ての生活にその心を浸して行くことは、吾々にとつての積極的な忠義である」と（冒頭記事）。そのころとは、「君に誠を尽していつくしむこと」。「心の窓」欄は「事変の歌」を歌う。遠泳と図書持ちだしへの注意。

第 141 号（1937 年 8 月 18 日）の掲載記事は順に、「衛生」（無署名）、「こゝろのまど」、「御礼」、「お報せ」、「被服値段表（縫賃こめて）」、「感謝欄」。冒頭記事は表題にあげた「衛生」と、出征できない身にとつての「報国」を論じた——「吾々が吾々の摂生に注意して、来る日来る日を達者に暮し、皇軍の武運長久が祈願出来る」ことなのだとの自覚が表明されている。だがこれでよいのであれば、日々の生活をまっとうに送っていればよいこととなる。

第 142 号（1937 年 8 月 24 日）の掲載記事は順に、「流言蜚語」（無署名）、「注意」、「感謝欄」、「心の窓」。冒頭記事は現時を「非常時局」ととらえたうえで、「社会的に交渉のうすい此処の吾々もやはり時局に対する浅薄な流言を慎むは云はずもがな、暴力さへ用ひなかつたら何を喋々せうとかまはぬなど、極めて浅墓な考へを一掃」しようと、療養者のいうところの「社会」と異なる療養所での、しかし外部同様の「非常時局」対応をとろうと呼びかけた。「注意」欄では、病室に土足であがらないようにとの指示が出され、その理由は「清潔」に、とのこと。その名のとおりこの欄はいつそう、日々の所為への監視と矯正に意を注ぐこととなってゆく。

motion4 第143号(1937年9月4日)の掲載記事は順に、「癩治療研究所」(無署名)、「お知らせ」、「御注意」、「心の窓」、「感謝欄」。「村田前外島院長」による「癩治療研究所」設立の必要性を説いたパンフレットに記された、「救癩の本義は不幸の原因をなす癩病そのものを根絶してやることです」との文言をめぐっての議論が冒頭記事に展開する。執筆者は、「在来の救癩方針が隔離による根絶にのみ重点のおかれてみたことを注意したい」と掲げて、「人はなぜに根治薬の発見よりも隔離による救癩をのみ主眼とするのか。それ程、現在の科学は無力なのだろうか」と問い、「科学の世界に諦観などのあらう道理はない」と憤る。「五十年後の癩の根絶」を目的として隔離が実施されたが、それよりも療養者たちは「今の病苦が少しでも軽くなることを切願して足掻いてゐる」という現状から「根治薬の発見」が切望されている。

これはかつて同紙紙上(第31号、1933年8月1日)の冒頭記事「根治薬よ出よ」(執筆はおそらく長田穂波)で展開された議論の再登場である。時局ゆえか舌鋒は穏やかながらも、伝染病であるがゆえに隔離を実施し、それによって将来の伝染根絶が展望されるという予防の仕組みをめぐって、それが「現在」の「吾々」になにを「もたらしてゐるか」と問うところから根治薬が強く望まれているのである。「心の窓」欄もこの記事にかかわって、「村田正太著“癩治療研究書設立の必要”から」と題して、同書からの引用をおこなった。

第144号(1937年9月14日)の掲載記事は順に、「協力一致」(無署名)、「お礼」、「心の窓」、「お知らせ」など。同号には附録として「感謝欄」がついた。

第145号(1937年9月21日)の掲載記事は順に、「秋冷の気」(無署名)、「感謝欄」、「お知らせ」、「心の窓」、「潮風」。(前掲阿部「かくれんぼの書史」収載の目録で第145号欠号としたが、ここに訂正する)

「相愛の道の記念碑が作業部の奉仕によりまして、あのやうに立派に出来上りました」との「お知らせ」があり、「心の窓」欄は、その相愛の道の手前にひろがる「大島八十八ヶ所の由来」(表題)を伝えた。2012年9月の時点で、昨年(2011年)の台風被害によって、相愛の道は通行止めになっている。

第146号(1937年10月3日)の掲載記事は順に、「上半期逝く」(無署名)、「心の窓」、「お願ひ」、「お知らせ」、「感謝欄」、「潮風」。

「潮風」欄で、「藻汐短歌」が、この印刷所で印刷出来ることになった。社会の商売人に勝る技術がたのもしく、これからは何でも刷つて貰へるだらう。上本、岡田両氏の労を偲び乍ら、そのことを爰に報知しておく」との歓喜と満足と自恃が示された。この『藻汐短歌』は現在、大島にもほとんど残っていない。

motion5 第147号(1937年10月20日)の掲載記事は順に、「きそひ」(無署名)、「心の窓」、「注意」、「感謝欄」。「一時帰郷する人」の荷物についての注意がある。

第148号(1937年10月30日)の掲載記事は順に、「自由」(無署名)、「心の窓」、「感謝欄」。冒頭記事は、「自由と気儘」の峻別を説く。

第149号(1937年11月9日)の掲載記事は順に、「癩学会」(無署名)、「心の窓」、「感謝欄」、「注意」、「潮風」。冒頭記事は、11月15日、16日に高松で開催される学会にふれて、「救癩は全治を以てこそ根源と」することへの期待が表明された。

第150号(1937年11月21日)の掲載記事は順に、「自矜」(無署名)、「心の窓」、「お報せ」、「感謝欄」、「潮風」。

冒頭記事は、このところいくつかの療養所で論議されている「家族制か、自治制か」との問題をとりあげて、これは「理論上」でなく「事実」をふまえて考えなくてはならず、「各療養所当局者が吾等のこの島を訪れたと仮定したら、彼等は一様に自治制の如何なるかを、注意して見てをるに相違ない。今日に於ける吾大島は、全国各療養所を通じて、自治制の代表格となつてゐるのであるから」との矜持をみせる。記事表題の「自矜」には、「じぶんのほこり」とルビがふられていた。矜りを持つことが責任の自覚につながり、それはまた謙譲の言動へといたるとの覚悟を表明した稿である。

「心の窓」欄では、「藻汐草の近頃の飛躍」がよろこばれた。

第151号(1937年11月30日)の掲載記事は順に、「社会的なもの」(無署名)、「感謝欄」、「心の窓」、「しほかせ」。「吾々の住む位社会から切り離れたものはない。吾々は常に、大

島から外を一口に社会と呼び慣れ、大島だけが社会の外にひとりあるものゝ如く合点する。しかし、この呼び名は便利上であつて、決して正しい呼び名ではない。だから吾々は錯覚を起してはならないことが肝要である。〔中略〕吾々の住ひが、社会とは全然切り離れて存在する如く思ひこんではならない。〔中略〕大島と謂へども、やはり社会の一環であることに違ひないのだ」と説く稿が「社会的なもの」。

第 152 号（1937 年 12 月 10 日）の掲載記事は順に、「虚礼の廃止」（無署名）、「注意」、「お礼」、「感謝欄」、「心の窓」。「注意」欄がかまびすしい。「心の窓」欄は、前号冒頭記事にいう「社会」に言及。

第 153 号（1937 年 12 月）の題字下の発行日が欠けている。この号の第 1 面は、紙面を区切る「南京陥落祝賀号」の大きな文字と、その背景に大きな赤く刷られた円——紙面全体が日の丸をあらわしている。いままでの号にない、統一された紙面構成。

第 153 号（正しくは第 154 号。1937 年 12 月 28 日）の掲載記事は順に、「年末」（無署名）、「心の窓」、「感謝欄」、「潮風」といった記事がならぶ。

「潮風」欄から 1 筆——「○謄写版はズツ岡田さんに切つて戴いた。下手な文章がどれ程、皆様のお目にとまるまでには加工されたか知れない」——いわゆるガリ切りの担当者がわかる。さて、同欄末尾が「○ではお互ひよい年越しを致ませう。今年中の盲言、こゝにまとめて多謝である」となっていたから、この号が 1937 年最終号でまちがいない。つぎは新年号=第 155 号となる。やはり第 154 号はノンブル重複で飛ばされたのだった。

motion6 第 155 号（1938 年 1 月 1 日）もすっきりとした紙面構成になった。3 段のうちの最上段を富士山と太陽のイラストとし、太陽は赤く刷られている。掲載記事は、「新年の辞」（無署名）、「潮風」のみ。

第 156 号（1938 年 1 月 25 日）の掲載記事は順に、「持久力」（無署名）、「潮風」、「心の窓」。「潮風」欄から 1 筆——「○病者の精神生活は宗教と文芸である」と。この観点は各療養所にかなりひろがっていたとみえる。

第 157 号（1938 年 2 月 25 日）の掲載記事は順に、「国民精神総動員」（無署名）、「潮風」、

「心の窓」。

冒頭記事は、この時局下にあっては、「病者が病者らしく、と、云ふことは、何も、病者らしい顔や形を作れ、と、云ふのではない。病者の本文を守つて、この非常時局の打開を、吾々が打つて一丸となつて祈念するばかりである」のだから、「身を治めることをないがしろにせず、うははづみをしないこともよいことだらう」との自覚をみせる。

第158号(1938年3月29日)の掲載記事は順に、「挨拶に代へて」(無署名)、「潮風」、「心の窓」。

「潮風」欄から1筆——「○兎に角、大島の吾々は現在患者自治制のヒナ形である。自治制か家族制かは、吾々が良いか悪いかで決定されるのである」と、役員の交代にあつての自負をみせた。

第159号(1938年4月16日)の掲載記事は順に、「えらばれて」(無署名)、「潮風」、「心の窓」、「一月ヨリ四月マデノ入所者」、「一月以降退所者」。

「潮風」欄から2筆——「△報知も今号より編輯子交代△今井前学芸は輪転機頭脳をもつて任じられた偉才」。

第160号(1938年4月28日)の掲載記事は順に、「予算」(無署名)、「懇談会のことども」、「潮風」。紙面中央であたらしい総代と副総代の発表。前者が上本隆重、後者が笠井幸一。「潮風」欄の1筆も、「今号より岡田さんに代つて謄写版を日野さんに御苦勞をかける事になつた」と報せ、もう1筆で「謄写技術もなかなかでない」と誉める。

第161号(1938年5月13日)の掲載記事は順に、「各種団体申合せ」、「心の窓」、「御知らせ」、「保育所便り」、「潮風」。いわゆる巻頭言、または新聞であれば社説にあたる記事が本号ではみえない。「潮風」欄から1筆——「△昔は入所したが最後、一步も島より出る事は許されなかつた」と。現在では「△一時帰省は破天荒の恩典である」と。

motion7 第162号(1938年5月23日)の掲載記事は順に、「堅忍」(無署名)、「心の窓」、「御知らせ」、「五月以降入所者」、「四月以降死亡者」、「潮風」。「潮風」欄から戦時下ならではの数筆を——「△役所と委員会と一般とが三位一体となつてこの難局にあたらね

ばならぬ△役所や委員会がどんなに節約を叫んでも、この中の一つが欠げると、ことは行へない、この三つが一丸になつて、始めて、ことは成就する△然し考えると、六百人が一人欠けても、同じこと△俺一人位やつても、やらなくても△こんな考を持つ者は、共同生活の大敵である〔中略〕△自分の為でもない、品の為でもない、不自由を忍ぶ事は、大日本帝国の為だと思へ△国の為となれば、喜んで死んでゆく日本国民の気魄があるか△あつてこそ忠良なる臣民と名がつくのだ。

第163号(1938年6月6日)の掲載記事は順に、「心合せて」(無署名)、「心の窓」、「お知らせ二つ」、「潮風」。「心の窓」欄は学芸部名で「断種」を論じる。断種は避妊の一種であるが、しかし、「命断絶、即ち殺人」だといいいながらも、「生れた児も、親が癩であると云ふのでは、寧ろ生れない事を希望するであらう」と、推測により断種を肯定する。この稿で引用された言は、「厚生省予防局長高野六郎」による。

第164号(1938年6月18日)の掲載記事は順に、「飯島保直勇士のこと」(無署名)と「お知らせ」と「心の窓」。「心の窓」欄には、「渡河」と「軍馬手入」のキャプションがついたイラストつきで、歩兵一等兵飯島の手紙を転載した。この手紙が大島に漂着したのだという。それへの感激をあらわす紙面となった。飯島一等兵の死への「覚悟」に「日本魂」を感じ、「はからずも、この紙片が島に漂着した事は、何か吾等に、ちつとしてゐられない教訓を与へられるのである。／病むとは言へ、国に報ずる義務を持つ吾等は今顛倒の立場にあるのである、心して飯島勇士の日本精神に倣ひ、益々銃後国民の義務を果し、以つて君恩に報ひなければならぬのである」とまとめられた記事は、療養所における、療養者としての報恩を説いている。

第165号(1938年7月8日)の掲載記事は順に、「送別の辞」(無署名)、「心の窓」、飯崎吐詩朗「お別れに際して」、「お知らせ」、「潮風」。ほぼ紙面全体を使って、1934年の「関西大風水害」で被害をうけた外島の療養所からの避難者が、落成した光明園に移ることへの辞。

「潮風」欄から1筆——「△部数僅か百余の報知が日本に紹介された訳、と共に大島が」。このときの数字か、あるいはつねにそうなのかは不明ながら『報知大島』の発行部数が100

あまりだとわかった。

motion8 第166号(1938年7月26日)の掲載記事は順に、「あの日あの時」(無署名)、「お知らせ」、「心の窓」、「潮風」。

第166号(正しくは第167号。1938年8月5日)の掲載記事は順に、「電気開通」(無署名)、「心の窓」、「奥村さんからのお便り」、「其後の新入所者」、「其後の退所者」、「其後の死亡者」、「お願ひ」。「其後」がいつ以降なのかかわからないが、退所者が9名もいた。「朝鮮」の表示が2名にみえる。

第168号(1938年8月26日)の掲載記事は順に、「感謝」(無署名)、「包布と襦袢のこと」、「潮風」、「心の窓」。

第169号(1938年9月10日)の掲載記事は順に、「自然の猛威」(無署名)、「心の窓」、「向上函の中から」、「其後の新入所者」、「其後の死亡者」、「潮風」。

「向上函も、皆さんの御理解に依つて、よい参考と資料を与へられ、島の向上に資してゐる事を喜んでゐます」と始まる記事がある。いつこうした函がおかれたのか、その記事はなかったようにおもう。この向上函の一端を発表する記事を見よう。8月30日に慰問金2袋と手紙が封筒に入って向上函に入れてあったという。それを、「向上函が、こうした事にも使用され、有意義に活用されてゐる事を喜んでゐます。贈られたそのものは些少でありましても、贈られた御心に、尊いものを感じます」と記事はいう。その手紙が「全文のまゝ」転載されている。

私は入所以来、何ひとつとして皆様の為に尽くしては居りません。かへつて大変お世話になつてゐます。誠に感謝感激の外は有りません。私は元気です。本日有難き慰問金二十銭をいただきました。この尊いお金を私は私のお小遣ひとして費消する事は本当に勿体ない事と存じますので、誠に小額にておはずかしい次第ですが、病気の重いお方のお小遣ひにでも使つて下さい、御願ひします。／一患者／総代様

——一人ひとりの、そして「島」の「向上」をはかろうとする運動の装置として「函」があり、それが機能していることをよろこぶ記事である。

第170号(1938年9月25日)は、「飯島勇士哀悼号」(「潮風」欄に記載)となった。さきの第164号でその手紙が感激をもって紹介された飯島一等兵が戦死した。紙面は、「噫、飯島一等兵」(無署名)、「飯島勇士のお便り」、「潮風」、「心の窓」。飯島一等兵からの手紙は、「所内ラヂオに依つてお知らせした」という。「心の窓」欄では、『大阪朝日新聞』の戦傷死報道を転載した。

第171号(1938年10月6日)の掲載記事は順に、「上半期終了」(無署名)、「お知らせ」、「潮風」。

第172号は欠号。

motion9 第173号(1938年11月10日)の掲載記事は順に、「吾等の記念日」(無署名)、「御知らせ」、「新らしく出来た作業」、「心の窓」、「潮風」。「吾等の記念日」とは何か?——「昭和五年十一月十日、この日は吾等癩者に暗黒より光明を与へられた、記念すべき佳き日である。／皇太后陛下に於かせられては世に入れられない吾等恵まれざる癩者を、ことのほか御憐みになり、遠く光明皇后様の御聖徳を御継ぎ給ひて、吾等に御救ひの御手を垂れさせ給ふたのが、去る昭和五年の十一月十日」その日なのである。

ここでは、近衛文麿内閣総理大臣による「事変の声明」にある「禍を子孫に残さず」をうけて「癩問題」がとらえかえされ、「癩が完全に根絶された時、この癩の汚点は日本から拭はれ、生れ来る子孫は、この人生最大苦から免れる事が出来るのである」と展望し、その「癩問題」の「解決」もまた「陛下の御意志に添ひ奉る」こととなるという。

「お知らせ」欄では、「長い間隠れた奉仕として、絹川、下高両氏は不自由な方達の為に、爪切りをして下さつてみました」とそのことを尊び、そこに「相互扶助、即ち同病相愛の精神に生きる生活」を見出し、ここに爪切りが「御役所より〔中略〕作業下附金が出る」作業となったとの報告がなされた。

第174号(1938年12月19日)の掲載記事は順に、「十二月」(無署名)、「潮風」、「予告」、「其後の新入所者」、「心の窓」。

第175号(1939年1月1日)は新年号で、紙面第1段に松と近隣の島と鳥と、そして赤

く刷られた太陽を描く。つづく記事は、「元旦の辞」（無署名）と「潮風」。

第176（1939年1月23日）の掲載記事は順に、「自重自戒」（無署名）、「守つて頂きたい」、「潮風」、「其後の新入所者」、「其後の死亡者」、「心の窓」。冒頭記事は、「積極的に、国民としての務めが果たせない吾々は、せめて、日常生活の上にも、つゝましやかな、まじめさを具現したいものである」とのところがけを提示するにあたって、あらためて、「毎度言ふが如く、自治とはみづからを治めるの言ひである」と掲げられた。この自治の実施については、「潮風」欄で、「自治の本願、本願の徹底、貫徹はみんなの自覚にあり」、また、「一人即ち一室に及び、一室即ち自治会に及び、自治会即ち療養所全体に及ぶと云ふ事を知らなければならない」との指示が記載された。（前掲阿部「かくれんぼの書史」収録の目録で第176号欠号としたが、ここに訂正する）

第177号（1939年3月28日）の掲載記事は順に、「任期終了」（無署名）、「お知らせ」、「潮風」、「心の窓」。末尾の欄で、任期終了、退任にさいして「公私の別」をつけることが説かれる。

motion10 第178号以降、題字下に発行年が記されず、月日のみとなってしまう。すでに別稿（前掲阿部「かくれんぼの書史」）に記したとおり、これらの号の発行年を1941年と推定した。1941年4月24日発行とおもわれる第178号の紙面は、「作業の義務制」（無署名）と「回覧板」で、巻頭言コラムとこれまでのもろもろを1つにまとめた「回覧板」欄とに紙面が構成された。

冒頭記事の書き出しは、「協和会の総人員は現在六五八人である。普通室の総人員は男三〇三人、女九七人であつて、合計この四〇〇人が作業出来る人である」と。自治会が役所の指示をうけて「協和会」と名称変更したのが、1941年4月1日のこと。組織改名後の最初の発行号がこの第178号なのだろう。本号「回覧板」欄の1筆には、「○報知大島の冬眠もかなりながかつたが、回覧板がはりに一つの新体制で行かうと両眼こすつて躍り出た次第である。依然にかはらない御愛読のほどこそ机前端座しておねがひするところである」とある。この「冬眠」がおそらく2年と1か月のあいだの休刊を指すのだろう。

第179号(1941年5月10日)の掲載記事は順に、「生活刷新」(無署名)と「回覧板」。

第180号(1941年6月1日)の掲載記事は順に、「習慣」(無署名)と「回覧板」。

第181号(1941年6月18日)の掲載記事は順に、「物資」(無署名)と「回覧板」。後者の1筆に、「○国立になつて尚更恥しくない立派な病者でありたいと願ふは誰しもの胸中だらう」と、目前の1941年7月1日におこなわれる療養所の国立移管をみすえている。

第182号(1941年7月10日)の掲載記事は順に、「国立移管」(無署名)、「回覧板」、「国民新礼法」。冒頭記事は、「今こそ吾々は他の数々の療養所と共に、国家といふ大きな鏡の前に一様に立たされたのであつて、公立と国立との間に従来はさまれてきた不合理が解消した反面、厳正なる批判を要請される立場におかれたのである。〔中略〕そして、その私達の新体制が『国立になつたから』といふことと共に、国家の要請する時局柄といふことに忠実に副はねばならぬことは、理の当然であらねばならぬ」と。

国立移管とともに大島青松園と療養所の名もかわった。「回覧板」欄の1筆は、「○青松園となつて国立第一歩である。青松園とは実際よい名前であると思ふ。青は平和を象徴し、松は長寿にして色をかへざるを意味する。もつて古い伝統であり、併せて古い平和の園である」。この新名称は「懸賞募集」による当選名で、この応募は、「青松園」3名、「清楓園」1名、「郁生園」1名、「翠松園」4名、「香楓園」3名だった。最多応募の名ではなかったのだ。

第183号(1941年8月2日)の掲載記事は順に、「娯楽」(無署名)と「回覧板」と「国民新礼法」。この号に押された印影は「総代之印」。「回覧板」欄で、「消毒」による郵便物の「汚損」がとりあげられた。

第184号(1941年8月20日)の掲載記事は順に、「礼儀」(無署名)、「回覧板」、「国民新礼法」。この号をもって現存分の『報知大島』が終わる。この号に休刊や廃刊についての記事はなく、『報知大島』がいつまで発行されたのかはいまのところわかっていない。

motion11 本稿でとりあげた自治会所蔵分『報知大島』綴第4分冊には、1937年4月から1941年8月までの発行号が綴じられていた。日中戦争が全面展開してゆくこのとき、

『報知大島』紙面をみるかぎり、大島で自治活動は継続しておこなわれていたとみえる。ただし、このまえの時期=綴とくらべてみると紙面はいっそう簡素となり、自治の活動を発信する挙動に陰りがあらわれたようだ。

そうしたなかで紙面に文字どおり彩りを添えたのが、太陽の挿し絵だった。「南京陥落祝賀号」と題された第153号（1937年12月）は、現存する『報知大島』のなかでもっとも多く紙面に赤が塗られた号となった。まるで紙面全体が日の丸の旗であるかのように彩られたその赤は、つぎの新年号（第155号、1938年1月1日）で富士山と太陽の挿し絵に、もう1つ翌年の新年号（第175号、1939年1月1日）でも太陽のそれに用いられる色となる。『報知大島』紙上の赤い日の丸の旗は、第110号（1936年5月21日）の「大島オリンピック」を伝える記事にもあった。戦時の日の丸とハレの日の初日^{はっぴ}とが赤の彩りで重なり、それらがもっとも晴れ晴れしく華やかで、また厳かで勇ましくもある章（いろどり、しるし、はた）となったのである。とりわけ見るものの目を射る第153号の紙面に塗られた赤は、そのままその紙面を、出征兵士を見送るために打ち振る旗にかえ得る仕掛けとなった。ここに療養者の「報国」がかたちづくられたのである。



本シリーズを閉じるにあたって、大島での自治活動の主体をみるとしよう。「自らを治める」というときの「自ら」とはだれかを問うのである。『報知大島』紙上でもくりかえし、一人ひとりが自治を担うこと、わたしにも自治の義務がある、と唱えていたのだから、それは大島に生きるすべての療養者に課せられていたのである。大島での自治活動は、修養という身の処し方と重なり連動していたのだから、なおのこと、「総親和」と「相愛」という共同性のなかで、だれもが自らを治めなくてはならなかったのである。

ただし、自治を深化させる共同性の中核には、島の「中堅」がいた。おそらく彼らは年齢でいえば20歳台から30歳台前半くらいまでの青年だったろう。そう、この中堅は男だった。自治とかかわって婦人会結成が促され、また、「盲人」による杖の友会が組織されたが、「中堅」とはいわゆる五体満足にちかい（少なくとも目が見え、手足を動かし得る）身

体をもった男にほかならなかった。紙面に登場する執筆者のほとんども彼らである。女も「盲人」も初期の投書欄にのみ登場した。

自治を唱え、自治に沿うように身を治める男たちは、しかし兵士になれない。戦場で死ぬことはおろか、そこに出征することもできない男たちが戦時の療養所の内側でいっそう身を立てようとするようすは、むしろキリスト教霊交会の機関紙『霊交』紙上や戦時下に回覧するための手づくり逐次刊行物『青松』にこそ明瞭かもしれない。

こうしたひとまずの観点から、隔離施設としての療養所における「自らを治める」というその仕組みを説くことが、わたしたちの課題であるとおもう。





15 頁左上：ローズマリーなどを漬けた瓶、同頁右上：カルピス+氷った西瓜
 同頁左下：南瓜のポタージュ、同頁右下：色どり野菜のフォカッチャプレート（ランチ B）
 16 頁左上：完食、同頁右上：お魚とキャベツのパイプレート（ランチ A）
 同頁左下：クリーム白玉あんみつ、同頁右下：カフェ・シヨルの看板

【追記】

9月上旬の大島行は、ひさしぶりにカフェ・シヨルのオープンとかさなつた。なかなか腕をあげ、フォカッチャもパイもみごとにおいしかった。メニュー・ボードの「今月のお野菜」には、「大智さん…じゃがいも（パン）／川上さん…ししとう（パン）／野村さん…フルーツトマト（パン）／キャベツ（パイ）／キュウリ／甘夏／森さん…キャベツ（パイ）、ナス（パン）／トマト（ジャム）、キュウリ／東條さん…カボチャ（ジャム、パン）」と記

してあった。今年の夏は東条さんからりっぱな南瓜を2つもいただいたことがうれしかった。南瓜は畑からとってからしばらくおいたほうが、甘みが増すという。スープと素揚げとパンプキンサラダにいただいた。

さて、メニュー・ボードに載っていない野菜が、ランチA・B両方のプレートに乗っている。それが薄いクリーム色の花——オクラの花。これが食べられる。ランチにいった2回とも、わたしたちはすべて食べたので(わたしは芯だけ残した)、シヨルのスタッフにびっくりされた。残す客もいるとい



う。教えられたとおり、噛んでいるうちにオクラの実のように粘り気がでてきた。食後にオクラ畑にいとってみると花はない。早朝に開くのですぐに摘むのだという。口におもしろく、目に美しい野菜、初めてのオクラの花だった。

まえば、カフェ・シヨルはたいてい第二土曜日に開店して、翌々日の月曜日に閉店となるスケジュールだった。9月の通知もそうになっていたはずなのだが、火曜日に園内むけに出張・シヨルを大島会館で開くという。これはいい企画だとおもった。どうも、元面会人宿泊所を改装したカフェ・シヨルは園内のひとよりも外部からの来客が多いようにみえるからだ(わたしたちもそうなのだが)。バリアフリーの大島会館ならば、車椅子のまま入ってゆける。出張・シヨルには、ふだんはみかけない在園者の人びとが、ひとりで、あるいは介護のひとといっしょに来ている。やはりせっかくのカフェには、在園者がたくさん来られる方がよい(わたしたちも部外者なのだが)。

この9月の大島行では、初めての3人での作業となり、自治会にある日誌の目録を作り



終えた（阿部安成、石居人也、松岡弘之「自治のオリジン—瀬戸内海の大島における自治活動の手書き日誌」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.172、2012年9月、を参照）。手慣れたひとたちによる目録づくりは、無駄なく迅速に進んだ。おおきな成果だとおもう。

今回も霊交会のお世話になった。その霊交会が持つ霊交荘にけしてちいさくはないトラブルがあった。お風呂が使えなくなり、お手洗いが使いづらくなったのだ。夏はことのほか来園者が増えるという。霊交会の信徒たちは、そうしたお客さんの奉仕に対する感謝をあらわす。

わたしたちにも、今年もことのほか暑い夏だったので、飲みものを運んでくださった。それもかなりの重さとなる量だった。断りきれずに、ありがたくいただいた。けれども、掃除や洗濯はいいからとの言はきかずに、これまでもかならずシーツなどを洗って干して乾かし畳み、霊交荘のなかもできるかぎり掃除をして帰る。ごみは、燃える、燃えない、ビン、カンと分別して、ペットボトルはラベルとキャップをはずしてから捨てる。冷蔵庫のなかには、すぐまた来るときはべつとして、自分たちの持ち込んだものは残さないようにする。どれもことさらにいうまでもなく、当りまえのことではあるが。

今回驚いたのは、研いで策にあけた米がそのまま冷蔵庫に入っていたこと、容器にグループ名と、使ってい〜よ〜、と書いた蜂蜜が残っていたこと。これらをおいていったものは、いつ研いで、いつ冷蔵庫に、だれが入れたのかもわからない米を、だれかが炊くとおもったのだろうか。蜂蜜をおいていったものは、おそらくせいぜい1週間ていどのボランティア滞在でも、どうにも蜂蜜がないと島にいられなかったのだろうか。グループ名が書いてあったとはいえ、そのものたちがいつ残していったかもわからない蜂蜜を（長期保存が可能だとはいえ）、だれかが食べるとおもったのだろうか。女性用の麦藁帽子もあった。

Mama, do you remember? というわけでもないだろうが。

もしかしたら、ああ、そのままでもいいよ、という声に促されてかたづけることなくボランティア・グループは島を離れたのかもしれない。



わたしは、在園者のいうことをそのままにはきかない、という構えをとっている。そこまでかたづけなくていいよ、といわれても、洗う、捨てる、吸い込む、拭く、そして整えてから帰る。ほかのひとたちが残していったコーヒの空き缶も、数十歩歩けばあるゴミ籠に捨てる。ちょっと憤りながら。

これはなにも道德の体現者として自己を定めたいからではない。自分たちが、なにをこの島でしているのかを、1つひとつ確認するための手続きのように感じているからだ。ほんの数日の滞在でも、かなりの量のゴミがでてしまうことがある。あらかじめの準備を誤れば、豆乳やヨーグルトを余らせ、それらは終いには捨てることとなる。このところ島を歩くとゴミが目立つようになったと感じる。数日ではあれわたしたちの滞在も、そうした環境悪化につながっているのだろう。

この、在園者のいうことをそのままにはきかない、とのわたしの構えは、調査、研究、記述の方法としての「聞きとり」にもかかわっている。話者の話には勘違いや忘却や、意図した嘘がふくまれるからというのではない。聞きとりの場、それがかつて「語らい」とわたしが表現したこともあったそれは、過去の出来事や事実が語られる機会というよりも、話者とその話をきくわたし（たち）との関係をあらわしていると感じている（このことについては、そのときといまとでは少しだけとらえ方がちがうかもしれないが、ひとまず、阿部安成「わたしたちは、彼らふたりの名を記さなかった。一癩そしてハンセン病をめぐる療養所での在園者との語らいを考える」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.154、2011年8月、阿部安成、石居人也、脇林清「コンクリート塊の牽引―瀬戸内国際芸術祭 2010

の解剖台展示とハンセン病療養所における死をめぐる生活環境」『滋賀大学環境総合研究センター研究年報』第8巻第1号、2011年10月、を参照)。

話をする在園者との語らいは、つねに、わたし(たち)がこの島の過去に展開した療養所のようにそこに生きた療養者の生をどのように考えるのかの cue (手がかり、相図、ヒント、次の出だし、出はじめのきっかけ、刺激) なのだとおもう。ここで、さきに述べたいわば島での過ごし方にもどれば、ここに数時間であれいるということは、つぎになにをするのか、べつにいうと、つぎになにをするどういうものとなるのか、という展開へのきっかけになるのだとおもう。

少しはわたしも配慮ができるので、あやふやな書き方になったし、はっきりとしない具体性のない書きぶりになってしまった。もっとわかるように書け、とは学部の最初の指導教官(当時は文部教官だった)からよくいわれた注意だった。

この夏、本シリーズを書いているさなかに、その方が亡くなった。今春、これまでの論稿をまとめたご著書をいただきながら、つついとお礼のご挨拶が延びてしまった非礼のなかでの訃報だった。弔慰は30年ぶりくらいのご自宅訪問となった。ぎりぎりまでお仕事をなさっていた書齋に祭壇がもうけられ、周囲には原稿や図書がそのままになっていた。

先生の字は少し癖のある、ちょっと丸まったかたちをしていた。ペンでしっかりとそうした字をお書きになっていた。おつれあいの話では、ついぞワープロやパソコンを使わずに、ずっと手書きだった先生の原稿をおつれあいが浄書していたのだが、遺作となったその論文集の執筆のさなかに、読みづらいからもっときちんと書くようにとおつれあいが告げたところ、先生は長年のその字体をかえたのだとうかがった。おつれあいは、それを強いたことと悔やんでおられた。

先生は、大久保利謙、遠山茂樹につらなる戦後歴史学のなかの正統実証主義の政治史研究者だった。そうした手法とビヘイヴィアの先生のゼミから、わたしのような社会史専攻者がでたことは異様で、もっとわかるように書け、とは、わたしの文章がまるで出来損ないなのではなく、歴史認識がおおきくちがうから理解されないのだとおもっていたのだが、

そうした憎まれ口ももうきけなくなりました。といっても、30歳以上の年齢差があったのだから、敬して遠ざけるといった接し方をわたしはしていたようにおもう。憎まれ口など恐れ多いことだった。

わたしの在学中は学部長、附属図書館長、評議員を歴任され、ほとんど研究する時間はなかったようにみえた。70歳を過ぎて、ようやく自由になったところで、国会図書館にかよって遺作となってしまった論文集をおまとめになられたとおつれあいからうかがった。研究と、政治と、お酒がことのほかお好きな先生だった。